

## はじめに

**今**回は、少し英語教育の実際的な問題に戻って、シラバスについて考えてみたい。特に、ネイティブ・スピーカーの現代英語コーパスと英語学習者コーパスを併用した調査結果から、より効率のいいシラバスを構築する可能性について検討してみることにしよう。

## 導入順序をどう決めるか？

シラバスは簡単に言えば「教えたいことのリスト」である。シラバス・デザインの詳細はいくつかの専門書(例えば Munby 1978; Nunan 1987; White 1988 など)にゆずるとして、シラバス構築の大きな問題の1つである「教える順序をどのように決めるか」という点について考えてみよう。

教える順序を規定する要因には以下のようなことが考えられる (Johnson 1998):

- ① **Grading:** 簡単なものからより難しいものへと教える。
  - ② **Sequencing / grouping:** 教える際に一緒にしておくことと便利なものをまとめて出す(例えば現在完了形を教える際には過去形を一緒に出すとか、some と any は一緒に対比して教える、など)。
  - ③ **Frequency:** 最も頻繁に出てくるものを早めに教える。
  - ④ **Usefulness:** 有用度の高いものは先に教える(例えば教室内での言語活動では命令文や What's this? などの文を多用する)。
  - ⑤ **Teachability:** 教えやすいものは先に教える(例えば This is a... などは実際に目の前にあるものを示しながら練習できるので教えやすい)。
- シラバス・デザインで難しいのは、実際にこのような基準をもとに作業を始めると、すぐに行き詰まってしまう点である。まず、必ずしも基準どうしの整合性がない。また、たとえ簡単なものやよく使うものを先にと言っても基準とすべきデータがないので、結局どれに関しても経験やカンに

頼るしかないといったジレンマが出てくるのだ。

ここですべての問題点を解決することは不可能だが、少なくとも「頻度の高いものから教える」という点についてはずいぶん状況は改善されてきている。この20年くらいで現代英語コーパスが急速に整備されたことにより、ネイティブ・スピーカーの英語使用状況に関して非常に詳細にデータが得られるようになった。そして、それらのネイティブ・スピーカーの英語使用の実態を参考にし、シラバスを考えようという試みが行なわれ始めた。次にその例を少し具体的に見てみよう。

## 不規則動詞リストの学習順序

コーパスを利用した一連の学習項目の精選や順序に関する研究に関しては、ドイツの Dieter Mindt が注目に値する。彼の一連の論文では、ドイツにおける英語教科書の文法事項の扱いがあまりに実際のネイティブ・スピーカーの英語使用とかけ離れていることを指摘して、もっと自然な英語使用の実態を反映したシラバスに改善すべきだとしている(例えば、Mindt 1996 参照)。彼の研究は、ドイツが日本と同じような英語教育の実態(文法中心、外国語教育である、など)であることから非常に参考になる点が多い。

その一例として、不規則動詞リストの学習順序について見てみよう。過去形の不規則変化が導入されてしばらくすると、たいていの場合不規則変化の一覧表が配られて、順番に暗記してテストをしたり、定期考査で出題されたりする。ドイツでも同様の形式でアルファベット順の不規則変化表が用いられているようだ。Grabowski and Mindt (1995) では、従来のアルファベット順の不規則動詞リストを学習者にただ初めから丸暗記するように指示するよりも、実際のコーパスによる頻度データをもとにした配列でリストを再構成したほうが効率がよいとして、新しい学習リストの提案をしている(表1参照)。

この表をもとにすると、最初の10語を学習することで不規則動詞使用率全体の46%をカバーする動詞群を押さえることになる(Mindt 1996: 49)。

# 学習者コーパスと

1	say	26	mean
2	make	27	set
3	go	28	meet
4	take	29	run
5	come	30	pay
6	see	31	sit
7	know	32	speak
8	get	33	lie
9	give	34	lead
10	find	35	read
11	think	36	grow
12	tell	37	lose
13	become	38	fall
14	show	39	send
15	leave	40	build
16	feel	41	understand
17	put	42	draw
18	bring	43	break
19	begin	44	spend
20	keep	45	cut
21	hold	46	rise
22	write	47	drive
23	stand	48	buy
24	hear	49	wear
25	let	50	choose

表1 最頻不規則動詞トップ50  
(Grabowski & Mindt 1995)

20語を覚えれば、83.6%になるから非常に効率よく不規則動詞のよく使うものだけをカバーできる (Kennedy 1998: 284)。

このような試みは些細なことのようにであるが、「ちりも積もれば山となる」で、いろいろな語彙項目や熟語・慣用句などのグループについて同様の分析が行なわれれば、かなり有効な提示順序の資料として活用出来るようになる。

ただしここで注意しなければならない点は、ネイティブ・スピーカーの使用頻度のみを考慮に入ればそれで十分か、ということである。たしかに Mindt らの試みは貴重な資料ではあるが、日本人英語学習者のターゲットとして、ネイティブとまったく同じ使用頻度を基準にするのは少々無理があるのではないだろうか？そこで、学習者コーパスの出番となる。上記のようなネイティブのコ

ーパスをもとにした学習リストを学習者コーパスのデータに照らして改善しようという試みを以下に紹介してみたい。

### 学習者の不規則動詞の使用法

学習者コーパスをもとにネイティブ・スピーカーの英語使用との差異を調査することで、ネイティブ・スピーカーとは異なる英語学習者特有のニーズがあることが浮き彫りになってくる。

次ページの表2は、現在整備中の学習者コーパス・データ(中・高生の英作文データ15万語)をもとにして頻度比較をしたものである。高頻度の単語の中には eat のように明らかに英作文のトピックの影響が見られるので順位自体はあまり重要視してはいけませんが、それでも彼らの使う動詞のうちいくつか特徴的な語彙選択の傾向が見られる。

#### ① 毎日の生活の様子を表わす動詞が多い

eat, sleep, buy, wake などのような daily routine に関わる動詞がよく使われている。これは英作文の課題の影響というだけでは片付けられないものがある。教室内では、自己表現活動の一環として身の回りのことや生活習慣に関する表現活動をかなり多く取り入れている。逆に言えば、それらの表現に必要な動詞を身につけて活用していると言えよう。

#### ② think のように意見や考えを言う動詞がネイティブより高い順位に来ている

#### ③ tell, show, leave, put などは学習者の使う不規則動詞ベスト20に現れて来ない。

これらの動詞は二重目的語を取ったり複雑な構文を必要とするものが多く、eat, sleep, buy などの語彙に比べると使用が困難と言えるかもしれない。複雑な構文を持つ make, give, get, take などの重要動詞も、学習者コーパスでは単純に目的語だけの用法が大多数で、学習者は複雑な構文になる動詞を故意に避けている可能性が高い。

以上のような特徴のほかに英語教科書との関連を見てみると面白いことが分かる。英語教科書は果たしてどのくらいネイティブの用法に近い不規則動詞の扱いをしているのだろうか？

## 英語指導

……(9) Corpus-based syllabus の可能性  
投野由紀夫

本国人	中・高	中学生	高校生
say	eat	eat	eat
make	take	go	take
go	go	think	go
take	think	take	think
come	buy	buy	get
see	get	get	buy
know	bring	bring	bring
get	become	become	make
give	make	see	run
find	come	make	become
think	see	come	come
tell	run	say	say
become	say	run	see
show	give	know	feel
leave	feel	feel	give
feel	know	give	wake
put	wake	wake	know
bring	sleep	sleep	find
begin	find	find	sleep

表2 学習者コーパスとネイティブのコーパスとの比較  
(不規則動詞トップ20)

### 英語教科書の不規則動詞の使用法

表3は英語教科書(中学全社8万語、高校「英語1」5社7.5万語)のデータをもとに不規則動詞のトップ20を抽出したものである。アスタリスク(\*)のついている動詞はネイティブのリスト20に出てきていないものである。これを見ると、高校教科書は非常にネイティブの使用頻度と近い順位を示している(スピアマン順位相関  $r = .881, p < .01$ )のに対して、中学教科書は上位10位を見る限りゆるやかであるが優位な相関ではない( $r = .602, n.s.$ )。

このことから、やはり入門期の英語教科書はネイティブの使用頻度とは異なる分布になっていることが分かる。write, speakなどはI can...などの導入で多用されているし、letはLet's...の導入で、meetはNice to meet you. や国際関連でいろいろな人に会う場面を強調して頻度が高くなっているようだ。flyは少々特別で、生徒に夢を持た

中学	高校
go	say
come	go
say	see
know	come
see	think
make	make
get	know
think	take
write*	get
take	feel
let*	tell
speak*	give
become	become
give	begin
eat*	leave
tell	write*
fly*	find
meet*	put
show	run*

表3 中学・高校教科書に見る不規則動詞の順位  
(トップ20)

せたいのか、どの教科書にもflyという動詞がよく出てくる。このへんは学習上必要であるという認識と、単純に教科書で特定のジャンルやイデオロギーが好まれるゆえに多用される動詞があるという認識が可能で断定的なことは言えないが、少なくともeatなどの頻度が中学教科書で顕著に高いことから、学習者のproduction dataは教科書からのインプットの影響を無視できないということは言えそうである(この分析に関する詳細はTono & Aoki (forthcoming) 参照)。

### シラバス作成の基礎資料整備の必要性

今回は不規則動詞のみを例としてとりあげたが、このようなネイティブの英語使用頻度データと学習者のニーズ分析を併用することで、よく使う、必要な表現を優先的に身につけていくという発想もシラバスに明確に加えて行きたいものである。

(p. 62 へ続く)

学習者  
コーパスと  
英語指導